

## 個性化・個別化教育と成田幸夫

学校現場からの教育改革：想起データ分析（4）

### Individualized Education and Yukio Narita

Educational Reform Based on Schools: Through Review of Effective Cases (4)

渡邊 規矩郎

Kikuro Watanabe

キーワード：オープンスペーススクール 個別化・個性化教育 緒川小学校 はげみ学習

#### I はじめに—研究の概要

##### 1. 教育実践の改革をめざす流れと教育主張

教育のあり方を変革し新しい方向づけをめざす学習理論と実践は少なくない。特に近年、「教育爆発時代」といわれた1970年代から1980年代にかけては、さまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられた。これらは教育研究集団を形成して教育実践研究を繰り広げ、時の流れの中で消長があるものの、現在の教育実践にも大きな影響を及ぼしている。その代表的なものを取り上げ、その問題意識と提唱されている改革策の概要を検討することにより、今日の学校教育、教育全般の問題点の克服をめざすことができると考える。

教育研究集団は閉鎖集団になりがちであるが、それぞれが持つ学習理論や研究成果を、共通の広い土俵の上に上げて比較検討し、それぞれが示唆するところをわが国の教育界の共通財産としていくことが必要である。現在の学校教育のあり方の何が問題であり、どのような方向へ解決しうるかについて、それぞれの学習理論や実践あるいは教育集団の取り組みが示唆するものは大きいはずである。それらを分析、その成果をもとに、現代における教育改革の課題を明らかにし、改革への具体的な提案を行うことを本研究ではめざしている。

筆者は、1966年以来、教育ジャーナリストとして、教育界に眼を注ぎ、教師教育、教員の資質向上、教育研究のあり方に関心を寄せてきた。特に1970年代から1980年代は、第一線の教育記者として、本研究で聞き取り調査を行う研究者、実践者に直接・間接に接した体験を持つ。従って本研究は、研究者自身の戦後教育実践研究史の追体験、振り返りでもある。先達の学校改革への夢と志を研究し、後に続く現場の実践者にこの「戦後日本の教育遺産」を継承してもらいたいと考える。

##### 2. 学校改革の先達の想起データ発表の意義

教育実践の改革をめざす流れについて、梶田叡一は、1970年代の「現代教育主張の総点検」を行っている（『総合教育技術』小学館 1978年4月～1979年3月）。梶田は、明治以来の教育主張の歴史的展開と現代における教育主張の全体状況を概観したあと、「学び方学習」「極地方式」「範例学習」「発見学習」「仮説実験授業」「主体的学習」「バズ学習」「集団学習」「完全習得学習」「教育工学」を取り上げ、それぞれの教育主張とその実際を検討している。本

研究では、梶田の研究成果をさらに発展させたいと考え、さしあたり、1970年代から80年代にかけて出現した学習理論の提唱者と学校現場における実践者の双方の代表的人物に聞き取り調査を行うことにした。

学校改革の先達の具体的な提案を含む主張は、学校現場が閉塞状況にあり、教育研究が低調になっている昨今にあって、学校教育にのみとどまらず、教育全般の改革にむけての課題を提起し、示唆を与えてくれる。

学校改革の研究者と実践者の想起データは、一定の聞き取り調査後において分析し、学校改革に関する課題や具体的な改善への方法論を明らかにしていく予定であり、本研究の意義は「学校現場からの教育改革：想起データ分析（1）ブルーム理論と梶田叡一」（奈良学園大学紀要第2集 2015, 3. 10）で記した通りである。

今までに10数人の聞き取り調査（過去に実施を含む）を行い、想起データとしているが、この想起データそのままでも、貴重なものである。学校改革の研究者と実践者のナマの声は、それ自体が今後、学校改革の歴史及びそれを牽引した先達を研究していく上の素材を提供する意味でも寄与するであろう。

とりあえず、聞き取り調査を終えた想起データを順次発表<sup>(1)</sup>して、この分野の研究に供したい。

## II 個性化・個別化教育：成田幸夫からの聞き取り

成田幸夫（なりた・ゆきお）は、1947年愛知県生まれ。1970年3月愛知教育大学卒業。愛知県東浦町立緒川小学校研究主任、東海市立上野中学校教務主任、大府市立大府中学校教頭、1999年大府北小学校長、2004年東浦町立片葩小学校長などを経て、2006年4月岐阜聖徳学園大学教育学部教授。現在、文部科学省「学校施設整備指針策定に関する調査研究協力者会議」委員、国立教育政策研究所「今後の小中学校の学習空間の在り方に関する調査研究」委員などを務める。

研究課題は、①教師の意識改革と個性化教育のカリキュラム研究②小・中学校における総合学習の単元開発③一人学び用ラーニングパッケージの研究。所属学会は、日本個性化教育学会（常任理事）、日本生活科・総合的学習教育学会、日本グローバル教育学会（理事）、アメリカ教育学会。主な著書に、『学校をかえる力』（ぎょうせい 1987年）、『合科・総合の個別化・個性化教育』（編著：黎明書房 1986年）、『ティーム・ティーチングシリーズ（全4巻）』（国土社 1998年）、『中学校の総合学習の考え方・進め方』（黎明書房 1998年）、『中学校の総合学習の第一歩』（共著：黎明書房2001年）、『若い教師を育てる』（編著：教育開発研究所 2007年）、『子どもを学びの主体として育てる～ともに未来の社会を切り拓く教育～』（共著：ぎょうせい 2014年）などがある。

成田幸夫からの聞き取りは、2010年2月22日、岐阜聖徳学園大学成田研究室で行った。以下は、その要旨である。

### 1. 個性化教育の理論と実践－その実践の発端

渡邊 個性化教育の理論と実践ということで、先般、加藤幸次先生に、研究者を代表してお話をうかがいました。今回はそれと対をなす、実践者を代表して成田先生にお話を承りたいと思います。

まず、実践の発端から。

成田 当時、都立大にみえた長倉康彦先生の門下生の、もういまは60代になりましたが、上野淳さんとか長澤悟さんという建築家がいらっちゃって、彼らが院生の頃だったんですかね、本当に足繁く学校に通って、建築家でしたから学習環境が1週間でどういうふうに変化するかを調査された。簡単にいえば机・腰掛けを含めてどうい

(1) 学校現場からの教育改革：想起データ分析（1）「ブルーム理論と梶田叡一」（奈良学園大学紀要第2集 2015. 3）  
同（2）「授業研究と横須賀薫」（人間教育学研究第3号 2015. 12）  
同（3）「個性化・個別化教育と加藤幸次」（奈良学園大学紀要第4集 2016. 3）

配置になって、そこでどういう教育が行われているかを克明に図面に落として研究してらっしゃった。それらは建築学会などで幾つか発表されたんですが、ちょうどその方々が私たちと同じ世代で、いま文科（文部科学省）でも一緒に仕事をさせていただいています。

絶望的なのは、名作といわれたオープンスペーススクールが次々とクロード化されていることです。例えば千葉の打瀬小なんかは、溜昭代先生が校長さんだった頃は5本の指に入るぐらい、実践的にも優れたものがあったけれども、いま訪問するともう全く普通の学校というか、普通の学校以下になってしまっている。例えばこの近くでは、私がいた緒川小学校もそうだし、岐阜県の池田小学校もそうだし、本町もそうだし、ちょっと歴史が古いけれども、福光なんかも含めて、個別化・個性化教育を標榜して実践をされた学校がことごとくボシャッてるというか、クロード化されているんです。

その原因は幾つかあるでしょうけれども、私なりに考えて、今日も、それから35年前も、教師集団の考え方、子ども観とか学習指導観というのが、実は結局何も変わってなかったというふうに思うんですね。それとここ数年の教育政策というのか、新自由主義的な市場原理の導入とか、文科の統一テストだとかというようなことがあって、本音としての教育観、学力観というのが、結局、30数年前と今日も現場教師は残念なことに変わってこなかった。学習指導要領の前回の改訂と今回の改訂を見ると、前回の改訂のときに初めてだと思うのですが、総則で個に応じる多様な教科指導をもっと工夫しなさい、総則の初っ端に文科は書いているし、しかも内容を規定すればいいはずの指導要領が、学習方法にまで立ち入って、いくつかの例示をしながら、学習方法の多様化を勧めているにもかかわらず、教室での学びの風景というのは、実はこの20年間全く変わってない。これはとても大きい問題だというふうに私は思うんですね。

本音として個に応ずるということよりも、手近なところで国語、算数・数学の得点をアップしなければ保護者の理解が得られないというような、まことしやかな「学力」向上の論法が主流になりつつある。一方では、東大の教育社会学の連中、例えばオックスフォード大学に今度変わられた荻谷剛彦さんなんか、「カリフォルニアの実験」を例にひきながら、ネガティブな帰結（＝人種・階層間の学力格差の拡大という“実証的”根拠）をことあるごとに引いて日本の教育を論じてきた。彼のエピゴーネンたちをして、「教育の個性化／自由化」は、いついかなる社会的文脈においても格差を拡大する」という神話を反復させるもとなつたと思われます。

結果的に彼らの主張、社会階層論というのは、ここ10年か20年ぐらいの日本の教育政策を補完するというのか、個別化・個性化をつぶしてきたし、逆風を吹かせた。結局、個別化・個性化教育を阻む元凶になってしまっているような気がするんですね。日本の教師の教師文化というのか、指導文化と、アメリカやヨーロッパの指導文化というのは僕は違うんじゃないかというふうに思うんですね。アメリカの場合には、カリフォルニアの例なんかもそういうふうに思うだけけれども、何か天から授けられた能力みたいなものがあって、それと人種の問題だとか所得の問題なんかが合わさって論じられる。日本の教師というのは、割とロマンティストが多くて、何か新たなアプローチをすれば能力の可変性みたいなものを信じているというのか、なかなか階層論にくみさない現場教師が多い。僕はそうあってほしいと思うだけけれども、「いや違うんだ、塾に行ってるとか、何かそういうことによって固定的に学力の有意差みたいなものが保障されていて、学校現場では、それはどうしようもないものとして認めざるを得ないんだ」みたいな発想は、多くの日本の教師はとらないんじゃないかというふうに思うんですね。

私たちも、緒川で始めたときに真面目に考えたのは、当時、国民的といわれる教育論議が盛んになってきたときに、「現場教師の1人として、私たちが考えられるベストな学校はこういうものです」という学校づくりを、新しい学習環境の中で思い切ってやってみようじゃないかという、何かとてもロマンティックな願いみたいなものが

あった。それが支えていたと思うんですね。

確かにあの頃、昭和53、54、55年の頃というのは、やればやるほど近隣の先生方からは批判をされたし、一番つらかったのは県教委、地方事務所と下りてくるあの行政機構から浴びせかけられる冷水というのは、形を変え、酷なほどやっぱり来ましたよね。

例えば当時教務主任をやっていて、当然誰しもが次は教頭に昇任していきだろと思うられていた人間が、蓋をあけてみたら横転で、しかも緒川よりも劣悪な環境の学校に転出をさせられるとか、私自身も実は同級生なんかと比べると校長になるのが2年ぐらい遅れているんですけどね。それはまあ不徳のいたすところなんだろうけど、でも本音を言うと、公立学校で一部の突出した学校はいらないんだ、あいつの学校は一体何だ、毎年1,000人も2,000人も人を集めて研究会を打って、本をばりばり書き、マスコミにも登場し、一体何をやっているんだ、そういう何か平準化の論理の中で一部突出した緒川という小学校は、やっぱり叩かれる運命にあったと思うんですね。しかもその風当たりが強ければ強いほど、緒川から出て行った職員が、出て行った先の学校で、緒川を踏まえた実践がスムーズに展開できたかという、みんなことごとく叩きつぶされていたというような状況があった。

いまは時代が変わって、緒川時代に主張していたことが、少々生意気な言い方をすると、次々と追認をされてきていますから、そんな時代は夢物語かもしれないけれども、例えば当時、本気で私たちが頭を抱えちゃったのは、単位時間を柔軟化するとか、それから体験とリンクして道德の時間を運営していくというようなことを言うと、ことごとくつぶされましたよね。例えば、単位時間を、小学校45分を常例とするという時代に、私たちは85分を1ブロックとする3ブロック制を主張した。もちろん地方事務所は真っ先にそれはだめだ、認められないと言ってきた。地方事務所イコール県教委ですから、県教委もだめだと言う。よせばいいのに、私はたまたまあの頃から文科省に出入りしていて、初中局の役人に、「実はこういうふうな考え方で85分にしたんだけど、やっぱりこれは法的にもまずいか」と聞いたら、「いや先生、それだったら全くかまわないですよ」というふうにパッと認められちゃう。文科がいいと言っているんだからといって、やっちゃいますよね。するともう県教委の頭を飛び越えて文科省と直接話をして、85分なんていう制度を導入すれば、当然、事務所・県教委はおもしろくない。それはわかるんですけども、でもその単位時間を延ばすということ1つをとってみても、猛烈な批判があった。笑っちゃうのは、道德を体験とリンクして行うということが、平成の元年までは教科調査官（もう亡くなっちゃいましたが、当時安沢順一郎さん）は絶対に認められないとおっしゃったんですね。ところがその後、横山利弘さんに代わり、もう今の指導要領では、前回の指導要領から体験とリンクした道德って当たり前のこととして行われています。

何が言いたいかという、現場の教師がよかれと思って考えたことは、そんなにめちゃくちゃな方向性って出さない。もっと信じていいんじゃないかと思うんです。しかし、いまから30年前、25年前というのは、それは認められない、そういう時代だった。だから、緒川小時代に新しく考えてやろうとした事柄は、お上というか、教育行政機構の末端からはことごとく睨まれたという印象が私はいまもって強いんですね。

あの頃、そうしたことを打ち出したのが、人によると、「君、それは20年早かったからだよ」とおっしゃる方もみえるんだけど、もう少し学校現場の教師のオリジナリティみたいなものが尊重される時代であってほしかったなという気はしますね。無学年制の「はげみ学習」なんて、いまだったら公文を先頭にして当然のことなんだろうけれども、あの頃はやっぱりそのこと自体いい顔をされなかったんですね。

ノーチャイムだって、校則を柔軟化することにしたって、抵抗は強かった。特に骨身にこたえたのは、僕は緒川で10年やった後、東海市という隣の市の中学校に転出をしたんですが、そこで校則をスリム化したときに、市教委の指導主事も入る、生徒指導主事の部会で、「大向こう受けをする校則に変えて、あの中学校は何だ。ああいう校

則に変えたら3年後ぐらいに必ず学校は崩壊するから、そうしたらみんなで笑ってやろうじゃないか」という話になってしまう。生徒指導主事の段階で、公式の場面でそんな話が出る時代だったんですね。当時、200何項目も校則があった学校で、前文と改廃規定を含めて17項目ぐらいのスリムな校則に変えた。回りの学校や生徒指導担当の理解が得られなかったわけですが、いまから考えると何か隔世の感がありますね。

## 2. オープンスペーススクール・緒川小学校への赴任

**渡邊** 私はその頃、日本教育新聞社の東京本社におりまして、加藤幸次さん、梶田叡一さんも同じように若かった。当時はよく国立教育研究所に出入りしていたんですが、そこで加藤さんから、「東浦町の町長さんは非常に元気のある方で、町あげてオープンスペーススクールに取り組む、ぜひ行ってみなさい」と言われた。緒川には多分うかがったことはなかったと思うんですが、その後、関西支社に転勤になってから、卯ノ里小学校に高浦勝義さんと一緒に行った記憶があります。加藤幸次さんとの出会い、オープンスペーススクールを始められた頃のこんな話してください。

**成田** 加藤さんは、ご承知のように愛知学芸大学を出られて、3年間中学校現場で教師をやられて、その後、フブライツ留学でウィスコンシンに出られて、ちょうどウィスコンシンから帰ってらっしゃった。加藤さんが国研に入られたときに、当時、国研の室長で後に国研の図書館長をやられた大野連太郎先生が、すぐ隣の東浦北部中学校の指導に入っていた。この中学校は、オープンスペーススクールとしては全国で2番目か3番目だったと思うんですが、ちょうど1町1中学校が長く続いていて、人口増で新しい中学校をつくらなくちゃあいけなくなった。そのときに長坂という町長が、夏休みごとにアメリカやヨーロッパを回っていて、わが町のこれからの教育はこれだというような新興宗教に近い何か閃きがあったんでしょうね。

それで、東京の設計士・杉森格さん（たしか、大学の同窓生だったはず）に相談されて、杉森先生は初めからオープンという発想で中学校を計画された。その後、それに隣接をする場所に緒川小学校があったんですが、もう1つ隣接する場所に保育園があって、その保育園もオープンとしてつくられた。中学校、保育園とオープンでつくってきて、ちょうど緒川小学校が全面改築の時期にあたっていて、行政当局としては当然のことながら東浦の新しい文教地区をつくらうというような発想で、改築にあたっては緒川小学校も当然オープンという発想で計画を進めた。ところが基本設計が上がってきた段階で、町長を除く町当局、教育委員会の教育委員さんは猛反対だったわけですよ。例えば東向きや北向きの教室があったり、全館にカーペットを敷いたりするのは、日本の風土には合わないし贅沢だとか、こんな新しい実験的なことを田舎の東浦という街でやる意味があるのかとか、コストの面も含めて批判があって、過半数の教育委員さんが辞任をされてしまった。そういうすったもんだした、つまり教育そのものが政争の具になっていた、そういう状況の中で緒川小学校が完成したわけです。

私はちょうど、その緒川小学校が完成をする半年前の4月に転勤をしたんです。当時、緒川小学校は学年3クラスか4クラスで、かなり大きな学校だったんですが、オープンに変わるということで、私が赴任をする1年前ぐらいから勉強会を校内でやってらっしゃった。北部中学校は連太郎さんと呼んで指導を受けていた。それで小学校は誰にするかというときに、連太郎さんの紹介で、ウィスコンシンから帰って来たばかりで、同じ知多半島の半田市出身の加藤氏を緒川小学校の指導者にということで、北部中学校は大野連太郎さん、緒川小学校は加藤幸次さんというふうにしみ分けが決まって、指導を半年ぐらい受けていて、4月に私が赴任をしたんです。

当時は加藤さんも若かったから、地域の保護者を集めてPRを半分兼ねた勉強会みたいな講演会をやったんですが、開けば開くほど保護者からは批判の声が高まっていたんですね。さっき申し上げたように、「こんな田舎で実

験的なことをやってくれなくても、うちの子はとにかく中学を出て、高等学校の試験に合格できる学力さえつけてくれれば、あとは何も求めないし、そんな実験的なことをやってくれなくてもいい」「第一カーペットが敷いてあるとか。こういう教育というのはできる子はいいけれども、うちみたいにできない子は置いてけぼりを食らわされるんじゃないか」というような素朴な不安感みたいなものが渦巻いていた。私が4月に赴任したときには、月に1回加藤先生を呼んで、勉強会、研究会を開いていたんですが、職員もオープン教育を支持しよう、やっていこうというグループと、もう隙があったらすぐにでも転勤をしたいというグループと、半々に分かれていましたね。

8月に引っ越しをして、2学期から本格的な研究を始めたんですが、2学期3学期で職員の過半数は転勤届けを出して、本当に転勤しちゃったんです。ちょうどそのとき、緒川で書いた本の1冊目の巻末に加藤さんがその頃のことを書いてらっしゃる。「もうこれはできない、ここでは実践ができない」というふう感じられて、その後1年間、加藤先生は本当に緒川小に足を向けることはなかったのです。

私ともう1人、教務主任と一緒に緒川に赴任したんですが、この2人はもともと気が合ったのか、安藤慧という先生で、この方は歴史的に、いまだから冷静に分析できるんですけども、コア・カリキュラムの最後の世代だったんですね。昭和30年代の初めまで知多半島では生活単元学習が一世を風靡していた。知多半島の南に河和という小学校があるんですが、この河和プランというのは、稲生先生とおっしゃる昔の師範の附属の校長を長くやられた方ですが、この方が生活単元学習にとっても熱心で、そういう学校をつくられた。そのときの門下生というのか、新任に近い形で安藤先生がいらっしゃった。そういう教務主任さんだったからこそ、非常に気が合ったんでしょうね。

それで、いまでいう総合学習（当時は総合的学習と呼んでいた）とか「はげみ学習」というのも、安藤先生がかなり積極的に取り入れていこうと提案をされた。私は「オープントイム」とか、「週間プログラム」という教科学習の1人学びの提案をして、両者の考え方を合体して緒川の骨格、6態様というカリキュラムができあがった。

できあがるまで加藤先生は、「もうこれはだめだ」ということでいらっしゃらなかったのですが、結果的にはそれがよかったような気がするんですね。

なぜかという、加藤先生が最初の頃に手掛けられたのは、算数科を、簡単にいえばロー、ミドル、ハイという3段階ぐらいの習熟度に分けて、かなり分厚いノートをつくって、習熟度別の指導をやっていこうということから入られたんですね。これが結果的にはうまくいかなかった。1学年を3つぐらいのグループに分けて指導しても救いきれない。つまりき箇所というのはたくさんあって、3つぐらいのコースに分けただけでは救いきれないというのが、その後の半年の実践ではっきりしてきた。そこから実は「はげみ学習」の提案が出てきて、この考え方というのは、要するに本来800人の児童がいれば、800通りの指導案をつくらなければいけないけれども、それは現実には無理。でも何か1人1人のつまりき箇所に応じたいい方法はないかというところで、1年から6年までの、例えば数と計算の領域を83のステップに分けて、その83の段階に応じたプログラムだったら、これは可能だというような考え方なんですよ。3コース程度の習熟度指導的な発想の失敗が「はげみ学習」を定着させたというふうに私は思っています。

もしも加藤さんがいらっしゃると、別のアプローチや、いろんなアイデアが提供されていて、そんなに大胆な発想で切り換えることができなかつたらと思うんです。たまたま1年間、加藤先生がいらっしゃらないうちに、かなり現場の知恵で工夫ができたものですから、1年半であのカリキュラムの骨格ができあがったんです。

翌年の4月から加藤先生をお招きするようになったときに、その段階で加藤さんは理論的に我々が考えた実践をうまく構造化された。例の「左に行けば行くほど個別的、右に行けば行くほど個性的」とか、「左半分が教科色の強い学習、右半分が総合色の強い学習」という、あの6態様の構造図ですが、あれを考えられたのは、結局スター

トして1年半たって加藤氏が再び緒川小学校に復帰をされたときにできあがったものなんです。

だからスタートは、たまたま大野連太郎さん、加藤幸次さんという国研ルートの講師団が最初から用意されていたということが1つ。もう1つは、教育事務所は初めから「この学校の実践に対して、愛知県内には特別の指導者はいない。教育センターや教育事務所にも指導者はいない。だからあなた方、勝手にやりなさいよ」というスタンスだったために、ヒロイックにならざるを得なかったことが、逆に力になったという感じがしています。

当時の高木という校長は、教育事務所筋から「緒川は特殊だから勝手にやれ」と言われたときに、学校に帰って来て「一体俺の学校を何と思っているんだ」と、怒り心頭に達していたことを思い出します。この地域に個別化・個性化の先達がいなかったから、かえってよかったとっていいと思います。

ただ、学校ができた経緯がそういうふうで、政争の具になっていましたから、これはあまり表に出してはいけないのかもしれませんが、最初の2年間は、左右両派から批判されました。例えば赤旗の地域版は毎号、北部中批判、緒川小批判を掲載するんです。マカレンコまで登場させて、「集団主義的な教育でないだめだ。個別化・個性化なんて訳のわからないオープン教育なんかはだめだ」と一方的に論を展開する。新聞折り込みの各戸配布の紙爆弾ですから、これは影響が強かったですね。

事実、私が赴任して5月に家庭訪問をやったときに、私の印象では9割方の保護者がオープン化に反対だったんですね。PTAの有力者なんかも待ち構えていて、反オープン教育を滔々とお話になって、最初は「何という地域だ」と思いましたね。それから職員室の中で議論をした内容が、1日もたてば保護者が知っているという、何か職員集団、仲間うちでも疑心暗鬼なところがありましたし、まあ最初の2年間ぐらいは、やっぱりかなりの緊張関係の中で仕事をしたという印象が強かったですね。

僕らは僕らで紙爆弾に対抗して、とにかくPRをしていかなきゃいけないということで、いろんな手を打ちました。例えば今でもあるのかな、NHK教育テレビの「お母さんの勉強室」とか「ETV8」とか、そんなような番組から取材の申込みがあると、もうほとんど受けちゃいましたね。一番最初に取材申し込みがあった「お母さんの勉強室」では、大宅壮一ノンフィクション賞をもらった木村治美さんがレポーター役でいらっやって、当時はまだビデオがなくてフィルム取材でしたが、それで30分番組を制作された。そのときにはこちらで通信柱に、何月何日の何時から教育テレビで放映されるから見てくれ、というようなPRをするなど、とにかく地域の保護者の方々の理解を得るといことは、とても気をつかいましたね。

グラフ誌を考えたのもちょうどその頃です。PTA新聞というのは大抵学期に1回発行するんですが、あえて年間2回にして1回分減らしてお金をためて、グラフ誌みたいなものを地域に全戸配布しました。

授業参観や学習公開では大失敗をしました。親が授業参観が終わったあと職員室に怒鳴り込んでいらっやって、「授業を公開するというから忙しいのに仕事を休んで学校にきたのに、1時間中子どもを探していたんだけど、子どもを見つけることができなかつた。我が子を見つけることができないような授業参観というのは一体何なんだ」とか言ってね。つまり好きところで学習しているものだから、子どもを発見することができない。その次の会からは裏面に校舎の見取り図を印刷をして、子どもにどの辺で勉強しているか赤丸を打たせて親に持っていかせるとか、工夫しましたけれども、いろんな手を打ちましたね。

夜間学校公開なんてのもやりました。夏休みに夜の授業参観をやるんです。これはボランティアを確保するためにも、じいちゃん、ばあちゃんが、ああこのぐらいだったら私にも協力できるというようなために、とにかく日頃学校にいらっやる機会のない方々にも学校に来ていただくという意図で、夜間学校公開を計画するんです。まあ精力的に最初の2~3年は、手当たり次第にやりましたね。

結局、9割方が反対勢力だった地域の考え方が変わったのは、理屈ではなかったんです。いいことじゃないんだけれど、「夜11時12時まで電気がついている。あんなに夜遅くまで先生方が頑張っている学校は悪い学校ではないんじゃないか」とか、「最近熱があっても子どもが学校に行きたいと言ってきかなくて困っている。あんなに学校好きな子どもを見たのは初めてだ。子どもが学校に行きたい学校というのは悪い学校じゃない。ひょっとしたら評判だけじゃなくて、本当はいい学校なんじゃないか」などなど、やっぱり素朴な子どもの姿が親の見方を変えたというところは、当時ありましたね。まあ牧歌的といえば牧歌的だったかもしれないけれども、でもそういう地域の見方がドラスティックな形で1年ぐらいの間に変わっていく。これは私たち学校で働いていても感触としては確かな手応えがありましたね。だからしんどかったけれども、あの10年間というのはおもしろかったですね。

渡邊 そうでしたか。私なんかは表面しか見てないですからね。

### 3. 個に応じた一人学びの教材開発

成田 ただ、今は何でもありの時代になったのに、何でこんなに全国の小中学校が金太郎飴的で、個性をもった学校ができないのだろうか、不思議でしょうがないですね。私は定年の2年前に大学に来ないかと誘われて、とても迷ったんですが、まあエイヤツと思って覚悟を決めた。その理由は、校長時代の10年間に毎年のように新任を受けたんだけど、一貫して校長である私の方が柔軟だと思ったからなんです。

これではいかん。優秀だけれども頭の固い教員ばかりになったら、まあ東京の二の舞になっちゃうんじゃないか。つまり、公教育の現場の教師の活気がどんどん落ちていっちゃうんじゃないかと思って、こんなのだったら大学の4年間で洗脳した方が早いかなというのが、ちょっと大げさというのか、生意気な言い方だけれども、まあ大学人になることを決断させたのはその辺が大きかったですね。

渡邊 私も兵庫教育大学に教員として入りました。兵庫県は「村を育てる学力」で有名な東井先生のゆかりの地です。学生に東井義雄さんを知っているかと聞いたら、クラスで1人か2人ぐらいしか知らないんですよ。これは困ったと思いましたね。まして、いま成田先生がおっしゃった先生方とか、昭和40年代、50年代の教育実践というものは知るよしもない。だから、これを何らかの形で伝えるような役目をしてみたいなと思いました。私は40年から59年まで東京におり、60年から関西に転勤してきました。20年間東京にいましたが、そのときに若い加藤先生とか、それから現場の先生方に会ったりして話に聞いたりしていますから、その20年間の東京時代というのは、私自身の教育を中心にした取材活動の振り返りの作業でもあるわけなんです。

過去の教育研究・実践の歩みから何かを受け継いで、授業研究とか教材研究といったものが再び盛んにならないかなというように思っているわけです。おっしゃるとおり教育は金太郎飴になっていますし、反復練習と言ったらすぐにそっちの方にポンと走りますしね。関西では梶田叡一先生がずいぶん現場における教育改革を主張されてきたんですが、その輪は小さくなってしまっていて、あとを引き継ぐものが少なくなっているのが現状です。

成田 教育研究のあり方自体も少し大胆さがあっていいんじゃないかと思うんですよね。例えばこの地域でいけば、例えば重松鷹泰先生とか上田薫先生なんかの、特に重松先生あたりの授業分析なんていうのは、私は文学だと思っているんだけど、記録をとって文字化して、分節に分けて、誰々ちゃんの発言に対して誰々君がこういう反応を見せて、それに対して教師がその意見をどういう形で取り上げてという、そういう分析の仕方が、私たちが学生の頃から新任の頃、一世を風靡していた時代でした。あるいはポケットにカードをしのばせて、アレっと思った子どもの発言をメモして、授業が終わったら職員室に帰って、それを転記してというようなことが、どの教師にもできるのかと、私は緒川時代の最初の頃、よくそのことを同僚と議論しました。



例えば浜松北とか、上田薫先生の指導を受けた安東小とか、すごい学校がある。だけどそれらの学校というのは結局、優れた教師集団を集めることができず実践が行われている。悲しいかな、我々のごくごく一般的な田舎の学校で、新しい器が与えられたに過ぎなかった。そこで「あなた方自由におやりなさい」という孤立無援状態だった。

当時、教育委員会は何をやってもほとんど文句を言いませんでした。そうであるなら、力のないごく普通の教師集団である私たちは、新しい教育研究の手法で新しい実践に取り組もうではないかと考えたわけです。それは、グループダイナミズムといったトラディショナルな教育研究の手法ではなくて、つまりこの子に対する最適な授業のあり方というような迫り方ではなくて、子どもをとらえやすくして（6態様というのはそういうものなのですが）かなり焦点化した力しか期待しない。それ以外の、例えば集団討議能力の育成は集団学習でやればいい。「数と計算」領域のできるかできないかというのは「はげみ学習」でやる、あるいは漢字が書けるか読めるかというのは「文字のはげみ」でやるけれども、「はげみ学習」で国語教育をやるなんて大それたことは考えないで、国語教育は集団的な教育でやればいい、というように、かなり焦点化した力をイメージして6態様のカリキュラムをつくった。その中で子どもをじっくりと観察をして、記録をとって、この子の持ち味、持続的な傾向性と私たちは呼びましたが、課題追求に対する持続的な傾向性をとらえた上で個に応じるという、一人学びの教材開発に役立てていこうというような、そういう手法をとったんですね。どちらの手法、つまり従来型の手法だろうが、我々がやろうとした手法だろうが、最後はその子にとってきちっとした学びが用意できるかどうかということ。結論は同じなんだけれども、攻め方が違う。そういう違う攻め方の学校があっただけじゃないかと私たちは考えたんです。

だから、結果的にあの6態様というのは、実はこれまでの日本の教育の中のいいとこどりをしているわけですよ。例えば総合的学習というのは、明確に生活単元的なイメージが私たちにはあったわけです。ただし、一人学びだけはアメリカのプランというラーニング・パッケージを日本型に変化させたものなんだけれども、それを除けば全て日本のこれまでの教育の中で行われていて、歴史的に見て評価されているものを学習のスタイルとして取り込んできただけなんです。だから決して新しいものではなかったんです。

そういう言い方からすれば、緒川小学校というのは世の中ではオープンスクールと言われているけれども、私たちはオープンスクールという言葉在意図的にあまり使わないようにして、個別化・個性化教育という日本語で表現したんですが、アメリカやヨーロッパのオープンエデュケーションとは、やっぱり似て非なるものだというイメージが、いまだに私は強いんですね。

ただ問題は、私たちが30年前につくってきたカリキュラムの基本的な構造が、今日も緒川小学校に何うと引き継がれている。それは嘘だろうと私は思うんですね。30年も時代が経ったら、もっと根本的にカリキュラムの構造というのは変わってこなきゃあ嘘だし、もっと言えば当時行ってきた総合的学習、いまの総合学習というのは、もっと形を変えたテーマ性でもって行われなきゃあいけないのに、いまだにそれが連綿と続いちゃっている。やっぱりオリジナルなものをつくり出すことが苦手というのか、まさに日本人的だなと思うんですね。

#### 4. 「建物の理念」と「教育の哲学」

**渡邊** 施設、ハードというものが教育に与える影響というのは、私はものすごく強いと思うんです。いまその辺の議論が少なくなっていますね。

**成田** おっしゃるとおりだと思います。それはもともと現場教師というのは、うさぎ小屋の感覚で、建物というのは与えられたもので、自分たちがやらなきゃあいけないテリトリー、仕事の領域というのは、その中でどういう教育をやるかというふうな、かなり自制心旺盛な教師が多いと思うんですね。私はそうじゃなくて、ハードとソフ

トをつなぐような人間もこれからの時代には当然必要だと考えます。

それから最初に渡邊先生がおっしゃった、建物が教育の中身を変えていく、大きい影響力をもつというのは、全く同感なのですが、同感というよりも、現場教師の1人としてはとても残念なことなただけけれども、ここ35年間、実は建築界が教育をリードしてきたという現実が否定できないと思うんですね。

緒川ができたのが1976～7年で、いまから35年ほど前ですね。あの頃ちょうど、日本にオープン教育とかオープンスペースという言葉が入ってきた走りの頃だったと思うんですが、歴史的に見れば北海道の丘珠、沼津の私立加藤学園さんなんかがあって、緒川ができる1年ぐらい前に福光ができていますよね。それで緒川ができ、同じ東浦町で卯の里ができ、岐阜で池田ができていくんだけど、あの頃の若い建築家集団は、現場教師よりも学習指導要領を読み込んでいたし、現場を熟知していたんです。

そういった連中が、欧米のオープンスペーススクールを参考にしながら、日本型のオープンスクールをつくってきた。建物が先にできて、緒川もそうなんですが、さあこの豊かな学習環境の中でどういう教育が構想できるだろうかというふうでずっときたわけです。こういう教育をやりたいという現場教師からの声があって、新しい建築が計画をされた例というのは、残念なことに1件もないわけです。つまり建築家が教育をリードしてきた。その状況というのは、小学校ではよかったですよね。それはラーニングセンター型だろうが、ワークスペース型だろうが、あるいはイギリスの格納庫でローパーティションで仕切るようなオープンスペースだろうが、アメリカ型のオープンスクールだろうが、とにかくそれは少なくともこれまでの4間5間の教室プラスより豊かな可変性の空間ができるということですからよかったです。ところが1つ失敗をしたのは、建築家が儲け主義のために、次はターゲットは中学校だとなったときに、ほとんど現場の現実を知らないまま、最初は小規模校、中規模校の中学校で教科教室型をつくったわけです。ホームベース（たまり場）をつくって、そこから授業ごとに英語のセンターへ行く、理科のセンターに行く、国語の教科教室に行くという、そういう教科教室型をつくり続けた。

私は具志川の悲劇と呼ぶんだけど、上野淳さんたちの当時の都立大のグループが、沖縄の具志川で小・中学校をほとんどオープンスペース化した。特措法の関係もあって補助金もたくさんありましたから、まあ一気につくっちゃった。ところが3年ぐらいたって中学校を訪問したら、見るも無残に壊されているわけです。教科教室が全部なくなって、教科の教室がクラスルームに名前を変えて、細々と授業を続けている。無定見に教科教室ばかりをつくり続けてしまった建築家の責任というのは、かなり大きいと私は思っているんです。

ここ10年ですね、小学校も中学校もじっくりと子どもの動きを観察して、中小の設計士も含めて、かなり質の高い空間を意図的につくろうと思ったのは。それまで、力のない研究者や建築家がつくった学校というのは、多目的スペースという名の無目的スペースを量産しただけで、結局、現場は使いこなせなかったというような、建物優先であったがゆえに、そういう問題点というのは、いまでも引きずっていると思うんですね。

もう1つ、その建物優先であったがゆえに、校長が何代が変わると、結局、戻るのは早いですから、その意欲的な実践がすぐにごくごく当たり前の普通の教育の姿に戻っていってしまう。打瀬のように児童数がふえて、ワークスペースにも教室をつくらなくちゃいけないとか、そういうものは特例で、多くの学校では、余裕があるにもかかわらず、クローズド化されてしまった。それは「建物の理念」まで現場教師の「教育の哲学」が迫ることができなかったからだと思うんですね。

まあ建築家にも言いたいことは山ほどあって、私は最近、文科の会議で建築家の集団に「あなた方、記念碑的なすごい学校建築をつくってしまったらお終いと思ってないか」と機会あるたびに言っている。現場というのは少なくとも最大限10年で教師は変わっていく。いまだと3年から5年で教師は入れかわるわけで、つくってから10年間

はこのスペースは、こういう願いや狙いをもってつくったスペースですよということを、学校の教員に伝えていく義務がある。いまは上物だけで30億ぐらいかかるわけですからね。投資対効果から言ったら実にもったいないことの繰り返しだ。とにかくつくったから10年間は責任をもつという、そういう建築家集団になってくれと言うんだけれども、そこまでフォローアップしてくれないといけません。

**渡邊** 私は建築家とのつながりがほとんどないんですが、かつて広島県府中市の小中一貫の府中学園を見せてもらったんですが、なかなか素晴らしかったです。

**成田** 岡山の遷喬小はどうですかね。一時期、あそこもかなり精力的にいい実践が行われていたんですよ。あそこも都立大系列の設計士が多分図面を引いていると思うんですが。しかし、教育の現場が、日本人の場合には個という意識がとても希薄でしょ。これは絶望的ですよ。

**渡邊** 遷喬小学校は取材しました。個に応じた指導とTT（ティームティーチング）に全国的によく取り組んでいる学校を30校ばかり取り上げて「日本教育新聞」で連載しましたが、その後が続かなかったですね。

**成田** TTも高浦さんが部長をやっている頃、報告書をつくるときにちょっとお手伝いをさせていただいたんですが、小学校で事例として多かったのが、最初の2～3年はうまくいくんだけど、その後は持ち時間の平準化に埋没してしまうという現実がある。中学校の場合だと、すべての教科に配当されるわけじゃなくて、例えば理科に配置されれば、2～3年理科でのTTの気運は高まるけれども、他教科、他領域の教員は、もうこれきしTTなんていう意識がないとかね。それから、そのTTのありようも、結局、何か日本人って習熟差で分けることが好きなのかどうなのか。主たる教師と従たる教師がいて、一定程度主たる教師が中心となって一斉指導をやった後、チェックテストか何かをかけて2つとか3つのグループに分けて指導するとか、ちょうどいまの少人数加配の弊害と同じで、文科は少人数加配を習熟度別指導をやるための要員と言ったことはただの一度もなかったはずなのに、現場ではもう90%以上の確率で少人数加配は習熟度別指導要員になってしまっている。

しかも絶望的なのは、確かに40人いれば20人と20人に分けることができるわけだから、少人数になる。人数が少なくなるのだから、より個に応じた指導がしやすいということは相対的には言えるんだけど、少なくとも一斉的な指導形態ではない指導方法が工夫されて、初めて少人数指導の良さというのが出てくると思うんだけど、まあこの学校に行っても多く見るのは、ほとんど一斉指導形態から変わらない指導スタイルで、少人数指導と呼ぶ習熟度別指導が行われている。それで校長さんなんかは何うと、うちは少人数指導をやってますと胸を張っておっしゃる。少人数指導ではなくて、その中の習熟度別指導をやってらっしゃるに過ぎません。

**渡邊** それが即、個に応じた教育というような見方ですね。

## 5. 教育のありよう、教師の意識を変えるために

**成田** 私もう六十路を越えたものですから、年齢のせいかもしれないんですが、教育のありようとか、教師を変えていくためには、理論ではなくて、情緒的に攻めることが何か一番早いんじゃないかという気がしています。ちょうど総合が始まった頃と今と、ある意味では似た状況があるんです。今回の改訂の直前に岐阜のある真面目な先生なんですが、総合をめぐって、「先生あと10年の辛抱ですよ」とおっしゃるんですよ。

最初は意味がわからなくて、どういうことでしょうかと聞いたら、今度の改訂で総合というのは3分の1減るんだ、そうすればあと10年辛抱すれば、総合は消えてなくなるだろうというのが、「あと10年の辛抱ですよ」という理由なんです。なるほど、そういう見方もあるかと思って、「いや、時間数は減ったけれども、あれは外国語活動がちょっと飛び出ただけで、むしろ文科は総合をいままで以上に力を入れているから、残念ながら10年待ってもな

くなりませんよ」というお話をしたんです。ただ、そういう教員に対して、ああ総合ってそういうことなんですかという、腹に落とすというか、これはやっぱり情緒的に迫る以外にないです。

例えば、兵庫は「トライやるウイーク」の発祥の地だけれども、私は緒川を出たあと東海市の上野という中学校、荒れた学校だったんですが、そこで教務主任をやったときに、まだトライやるウイークが始まる前、昭和63年～平成元年の辺だったんですが、2年生で2日間、授業日に勤労体験をやらせたんです。

親ははっきりしていて、保護者会で説明をして、協力をしてくださいというアナウンスをすると、「先生いいことはわかるけれども、来年からにしてください」「こんな大事な時期に2日間も授業日に働くなんてことは承服しかねる。そんな暇があったら英語の単語1つ、数学の公式1つ覚えさせてくれ」と、やっぱり親はストレートですから、そういうことをおっしゃる。それを説得してやりきっちゃったんですけどね。

終わった後、親が喜んでくれた1つの事例は、僕はあちこちで本にも書いたんだけど、交渉が成立してある場末の和菓子屋で2日間働いた女の子がいたんです。秋だったものですから、10時ぐらいまではショーケース磨きぐらいしかやらせてもらえなかった。10時過ぎて裏の職場でご主人が栗きんとんを蒸してひねって持ってきた。おかみさんが「これを並べてごらん」と言って指示をしたんです。賢い女の子だったから、売れ残った栗きんとんを店員側にして、できあがったばかりの饅頭をお客様側に並べたんです。並べ終わるのをじっと見ていたおかみさんが、ド叱ったと言ったんですね。「あんた見てごらんなさい、あんたが並べた饅頭にはあなたの親指と人指し指の跡が全部ついているでしょ？ 一元のお客さんだったら買ってくださるだろうけれども、指跡のついた饅頭をへっちゃらで売ったこの店からは、もう二度とお客様って買ってくださらないのよ。うちはおじいちゃんの代からの小さな和菓子屋だけれども、饅頭を売っておまんまを食べさせてもらっていると思ったことは1日たりともない。信用を売って御飯を食べさせてもらっているんだ。働くとか生きるというのはそういうことだ」と言って、すごい勢いで叱り飛ばしたらしいんですね。

当然、泣き崩れちゃったらしいんですが、1日働いて家に帰って親父と夕御飯のテーブルを囲んだときに、いつもは黙ってビールを飲んで、黙って飯を食って、自分が食べ終わると黙ってテレビのある部屋に行ってゴロンと横になる親父が、娘から「お父ちゃん、きょう勤労体験でおかみさんからこうやって叱られちゃった」という話をした。すると、生まれて初めて我が娘と向き合って、自分自身の仕事上の苦労話とか、逆に醍醐味なんかを語って聞かせたというんですね。

叱り飛ばしてくれたおかみさんもありがたいと思うんだけど、私なんかは、娘と向き合って初めて自分の仕事上の話を語って聞かせるというのは、これはすごい、ありがたいことだというふうに思うんですね。

いい子ばかりじゃなくて、前日まで職場が発掘できないなんていう男の子がいて、夜になって、これこれしかじかで働かなきゃあいけないけれども、働く場所がないと親父に話をしたら、親父も適当な人間で、「じゃあ俺の職場についてくればいいじゃないか」ということになった。名古屋の南区でガスの配管工をやってらっしゃる方だったんですが、朝、ワゴン車が迎えに来た、すでに3人の大人が乗っていて、自分と自分の親父と5人がそのワゴン車に乗り込んで現場まで向かったんです。道すがら冗談話に花が咲いたらしいんですが、現場にワゴン車がついて、車から一歩降りたときに、最初に乗っていた3人の大人の中で、一番若いと思われる人間に向かって、自分の親父が急に敬語を使って話をしはじめたというんです。当然、若いけれども上司だったんでしょうね。

その日の彼の勤労体験のレポートには、昼飯におごってもらったラーメンライスのうまさも書いてなければ、肉体労働の厳しさも何にも書いてない。たった1行、「親父も苦労しているなと思った」と書いてあるわけです。僕はこれは大好きなレポートですけどね。つまりたった1日でも、いい意味で社会の中で働いた経験を得させると、

すごい経験をいっぱいしてくるわけですよ。

当時、いまから20年近く前ですから、総合の時間なんてまだ認知されていない時代でしたから、いろんな教科、領域から年間35時間の時間確保をしなければならなかった。そんなキラキラ輝く体験をしてきた子どもたちを前にして、教室に帰って来た子どもたちに担任は何を喋っているかという、総合の裏づけとなる、もってきた教科領域の目標つぶしの話をしているわけですよ。

ところがそういう教師も、1年たって学校ごとに研究紀要を書こうとすると、「生きる力を育てるためのこの勤労体験は……」と書くんですよ。「おまえら、言ってることとやってることが違うだろう。生きる力というのだったら、教科の中でももちろん生きる力はあるけれども、勤労体験を通して、どのような子どもたちに考え方の楔が打ち込めたのかという、それをクラス全体で話し合っって共有する中で、働くということに対してどのような中2の段階で新しい1ページをめくることができたのかということ、本当はきちっと教室に帰って来た子どもたちを前にして、担任であるあんたはやらなきゃいけないんじゃないのか」と喋った経験があるんです。こういう具体的な話をすると、「ああ、総合ってそういうことなんですか」と言うんですよ。

最近めたらやたら難しい総合のテーマをつくって、やれ環境だ、やれ福祉だと言って、難しい内容ばかりやっているんだけど、もっと日常生活の中で子どもにフィットした主題を見つけることって、できると思うんです。

ところが結局、深く考えもせずに勤労体験をやらせている教員にとって、当日何をやるかという、10人ぐらいの学年教師を割り振って、1人頭10カ所ぐらいの企業を回って、「お世話になっています。うちの生徒は真面目にやっていますかね。ちょっと見せていただいてもいいですか。デジカメで1枚写真とらせてもらってもいいですか」とか言って写真をとると、次がありますからと言って帰ってきちゃう。それで子どもに礼状を書かせて送らせたら、それでお終いになっちゃうんだけど、違うんですよ。20編でも30編でもいいから、質の高い子どもの体験レポートを選りすぐって文集にして、企業主に送りつけて、それを読んでもらうことによって、「ああ中学校はこういうことを狙っているのか」とか、「逆に気を遣っていたけれども、こういうところでは思い切り頭ごなしに叱り飛ばしてもいいんだな」とかを感じ取っていただくことが大切なんです。礼状を書かせることも重要だけれども、教員として地域の教育力に期待したいのならば、そういう種を撒いていかないと、実りの多い勤労体験ってできないと思うんですよ。

だって、中小企業に中学生が3日4日働きに行くということは、企業主からみればペイしないというか、損をするに決まっているわけです。でも、いい顔をして地域の子どもは地域で育てるからお受けしますよとってくださるのは、ひょっとしたら教師よりも子どもを育てるということに関してきちっとした目をもっていらっしやると思うんですよ。地域が、もうすでにそういう見方をしていただけなのに、肝心要の教師の意識改革というのが、ほとんど進んでいないというか、傲慢なままであるのはとても残念なことですよ。

しかも私の専門領域である個別化・個性化教育の推進に対して、自分の考え方と違っていると、リスクばかりあげて批判をして、あたかも個別化・個性化の精神を自分が受け入れるということは、自分がやってきたこれまでの教育活動が否定されるがごとき感覚でもって毛嫌いをする校長や指導的立場の教員がいまだに主流を占めています。私は現場教師上がりだから、つつい現場教師に厳しい視線を向けてしまうけれど、保守的というよりも、単なる傲慢なだけだとか、もっと教師って意識を変えていかないといけないと思うんですよ。

**渡邊** 何で個別化・個性化教育って停滞、もしくは後退をしているんでしょうね。

**成田** 現場の先生方が1時間1時間の授業の醍醐味というか、それは6時間ともそんな醍醐味が得られる授業づくりは不可能に近いけれど、せめて1週間に2コマか3コマ、早くこの時間が来ないかなと手ぐすね引いて待つ

いるような、そういう授業づくりがやりにくい状況になってきているということはあるかもしれないですね。

卒論でうちの学生が、個別化・個性化の停滞している状況について、今年2～3人まとめて同じようなテーマで研究した者がいて、興味深く読んだんです。1つは、自分たちが育ってきた時代、つまり教育を受けてきた時代に個別化・個性化がなかったために、現場教師になった段階でイメージ化できないんじゃないかという考え方、2つ目に、政策的なところで、競い合わせの教育が大手を振っているがために、個に応じるということをやろうとすると、そんな悠長なことをやっていて大丈夫かというような批判で、それに耐えられないのではないかというもの。もう1つは、個別化・個性化が進まないのは、実はいままでの成功例が異常なまでのエネルギーをもって取り組まない、個別化・個性化教育ないしオープン教育というのは成功しなかった。成功している学校のいろんな出版物なんかを読むと、相当努力をしないとできない。そんな努力はしたくないという。この3番目の理由というのが意外にあるのかもしれないというふうに、これは私たちも責任の一端を担っているわけで、考えなきゃいけないんだけど、何か異常なまでのエネルギーを必要とする、だからいま定着しないんだというのは、当たらずといえども遠くない理由の1つなのかもしれないという気がするんですね。

## 6. 当時の保護者・若手教師が学校を変えることへの期待

渡邊 今後に向けてのお話で締めくくっていただきたいと思います。

成田 いま秘かに期待していることが1つありまして、緒川がさっき言ったみたいに、ここ10年ぐらい、ちょっとポシヤリ気味なんですね。全国的な評価もどんどん下がってきている。でも、去年あたりからPTAの研修会で私は呼んでもらえるんですよ。そこでハッと気づいたんだけど、緒川の全盛期に子どもとして勉強していた連中が30歳の後半ぐらいで、ちょうど小学生の子を持つ世代になってきているんです。

あの緒川という地域は、不思議なことに代々地帯をもっているのが多くて、女性が嫁いでも、結局帰って来て自分の敷地の近くに家をつくって、緒川に子どもを通わせるというケースが多く、いま3分の1から5分の2ぐらいまでは、保護者が全盛期の緒川の教育を受けた連中なんです。そういう保護者がいまになって私を呼んでくれるんです。何かというと、その頃の考え方だとか、学校の様子を話してほしいという求めなんです。

何でそういう求めが出てくるかというと、似ているんだけど、どうも自分たちが小学生のときにやらせてもらった活動とは違うみたいだと、保護者が見抜いているわけです。そして秘かに期待しているのは、学校理事会制度とか、いろいろ制度改革もあるだろうけれども、それよりも早く保護者が学校教育の中身に文句を言うんじゃないかと、私たちの時代はこうだったんだけど、先生いまはこういうふうな教育はできないのかというふうに、形態とか方法も含めて保護者が教師とディスカッションをする。つまり保護者が学校を変える、それから地域の中の学校として、多分、全国的にそんな例はないんだろうと思うんですが、緒川の教育を受けて育った者が、せっかくいま5分の2ぐらいが保護者でいるのならば、そういう新しい学校づくりのケースになるのではないかと思うんです。奈須正裕さんの奥さんの佐野亮子さんなんかと2人で、秘かに声がかかったら、必ず行こうというふうに話し合っているところですよ。

渡邊 それは何か鍵になりそうですね。そこから何かが生まれそうですね。

成田 それから私が緒川でやっていた時の新任に近いような若い教員が、ようやくいま研究主任ぐらいになっているんです。緒川のすぐ隣に石浜西という小学校があるんですが、なんと3分の2がブラジル人で、学区が全部県営住宅なんです。標準学力テストなんかをかけると、例の棒グラフで成績がプリントアウトされてくるんですが、評定「1」が1本では足らなくて2本もあって、「5」がゼロというような、そういう学校なんです。欠席率も非

常に高い学校だったんですが、この3年間で劇的に変わってきたんですよ。

その変わってきた理由が、自己存在感が実感できる楽しい学校づくりと、何と教科学習は1人学びを中心にやらせることだったんです。教科学習では、1つの単元に対して3、4通りのパッケージをつくって自学させると、これまで日本語へのハンディから学習に意欲を示さなかった子どもたちが、不思議なことに学び始めたんです。

これまでの外国籍児童生徒の教育というのは、まず日本語ありきで、日本語指導をやって、その上でないと日本の公教育というのは受けられないという考え方が主流だったわけです。JSLカリキュラムなんかがあって、まず日本語ありきだったんです。けれども、私はずっとこの学校に指導に通っていて、日本語教育ももちろん重要なんだけれども、もっと大事なのは、日本人化するための教育ではなく、人間として生きていくための学びを最優先させるべきだと考えたのです。このブラジル人の子たちは、永住する子も半分ぐらいいるし、20歳過ぎてブラジルに帰るケースもあるんだけど、どっちにしても市民として生きていくためには、理料的な考え方も算数的な考え方も必要なわけです。そういう広い意味での学びの成立ということを考えてときに、日本語をまず強制的にやらせるんじゃなくて、多様な学びの中で、まあ10が10ともできるわけじゃないけれども、10あったら、せめて6つぐらいは学びが成立をするようなシステムをつくる必要があるんじゃないかということなんです。

学校は劇的に変わってきていて、欠席率もめちゃくちゃ下がってきているんです。何よりもそこで働いている先生方が、いままでは部外者が文句を言うと、「成田先生何をおっしゃっているんですか、そんなに言うのだったら朝から晩まで一度学校に来て見てごらんなさい。いかに生活させるだけでも大変かということがおわかりになるから」と、つまり劣悪な環境にあるから、いくら努力をしても無理なんだという、すべてそうやってそれを免罪符にして努力してこなかった教師集団が、いま生き生きと活動している。

例えば、ちょうど去年が日伯100年だったんですかね。ホテルオークラで式典があったときに、その石浜西小の日本人5名とブラジル人5名の子どもが、天皇皇后両陛下の前でシュプレヒコールをやる。名古屋には「どまつり」というアップテンポの新しい踊りを楽しむお祭りがあるんですが、ブラジルの放送局がスポンサーについてくれて、ブラジル人の子どもと一緒に日本人の子どもが踊って見せる。来週は名古屋の国際センターで子どもたちが琴と語りによるかぐや姫の公演をやるんです。この間ちょっと見てきたんですが、小学校5～6年生にしては非常に質の高いパフォーマンスをやっているんですね。

東浦町という6小学校しかない小さな街で、実践が低下している緒川小学校があり、他方、いままでは目もあてられなかった石浜西小学校という学校がいま極めて評価が高くて、「文部時報」の巻頭のカラー・グラビア写真で4～5ページ紹介されるぐらいにまでなっている。教師集団の意識が変わったときに、どれぐらい学校というのは変わるのかという1つのいい例だと思うんですね。

渡邊 教育という営みを象徴するような話ですね。

もっともとお話をお聞きしたいのですが、ひとまずこのあたりで中締めとさせていただきたいと思います。はじめてお聞きするお話がほとんどで、たいへん興味深く勉強になりました。ありがとうございました。